

信長の父

織田信長についてはくどくどと話すまでもありません。

しかし信長の父親がどのような武将であったかについては余り語ったものはありません。

今回は信長の父親と織田家のルーツについて語ることにします。

信長の父親は^{だんじょうちゅうけ}弾正忠家の^{びんごかみのぶひで}織田備後守信秀と言います。

代々^{おわりのくに}尾張国（愛知県）の守護代の織田家の家老でした。

守護代は、室町幕府が国ごとに定めた長官の守護に次ぐ役職です。

弾正忠は朝廷の官職名です。当時実際には存在しない官職です。

織田一族はいくつもの家系に分かれますので、信長や父親信秀の家系を^{だんじょうちゅうけ}弾正忠家と言って分類します。

信秀は1511年（永正3）誕生で1552年没の人です。子の信長は1534年（天文3）の生まれです。信秀は42歳で病死しました。信長が20歳の時です。

信秀について語る前にここで織田一族のルーツについて話します。

織田^{やまとかみか}弾正忠家の主家で惣領家は、尾張国の守護代の織田大和守家と言います。

織田一族は元々は越前国（福井県）の織田^{つるぎ}劔神社の神官で土地の豪族でした。

足利幕府が立ち上がりその足利一族の^{しばけ}斯波家が越前国の守護に赴任した時にその被官（家来）になりました。14世紀の中頃でしょう。

斯波家は尾張国（愛知県）の守護も兼帯しておりましたので織田家は尾張国の守護代に任命されました。15世紀の初めの頃です。

初代の守護代は織田伊勢入道常松です。弟の常竹は守護代の下位の又代（又守護代）になりました。

ここらへんからややこしくなりますので別紙斯波家略系図・織田家略系図を参照ください。

その後常松系は伊勢守織田、常竹系は大和守織田を称して主家の守護斯波家に仕えていきました。

ところが、斯波家では家督騒動が起こります。応仁の乱（1467～1477年）の前です。これが応仁の乱の原因の一つとされています。

斯波家は家督の一人に義敏よしとしが、もう一人が義廉よしかどで、主家が分裂したことで織田家も両氏には分れて味方します。

將軍義政よしまさがある時期は義敏にある時期は義廉を味方して守護を任命したので混乱します。

応仁の乱では斯波義敏派（義政將軍・細川家）と織田大和守義定よしまさだは東軍となり斯波義廉派（山名宗全）と織田伊勢守敏広としひろは西軍となり互いに戦いました。東軍が勝利ですが、終戦後もこの対立関係は存続します。

応仁の乱後、越前国は朝倉家が守護に任命され斯波家は越前を追われ、斯波家の守護職は尾張国（愛知県西部）と遠江国（静岡県西部）になりました。

斯波家は尾張国を母体にして義敏よしとし（後継の義寛よしひろ）・織田大和守義定派よしまさだと義廉よしかど・織田伊勢守敏弘派とで争い、義敏・義定派が勝ちます。

義廉は越前に逃げ没落します。味方していた織田伊勢守敏広は勝った斯波義寛に服属します。

よって尾張国は守護斯波義敏の家系で続きます。

一方織田家は織田大和守系と織田伊勢守系が斯波家（義敏・義寛）を主家として並び立って仕えます。

その後勢力は斯波家と織田二家が並び立ちますが、守護代織田大和守家が主家斯波家や織田伊勢守系より勢力が優勢となります。

その守護代織田大和守家に有力な三家老が出現し、中でも織田大和守家の庶家（敏定の子か）の初代弾正忠良信が勢力を延ばします。

この家系で初代の孫が信秀で曾孫が信長に継がります。

信秀は父親の信貞の死没（1526年）で27歳で後を継ぎます。

親の信貞より受け継いで、信秀（信長の父）は勝幡城しょうぼたじょうを居城にして中島郡の一部、海西郡と海東郡を領域にしていたと思われます。

別紙尾張国略図を参照ください。

尾張国は上四郡には丹羽、羽栗、中島、春日井、下四郡は愛知、海西、

海東、知多となります。

信秀の勝幡城は海東郡と中島郡の郡境にあります。勝幡城の北東には清州城^{きよすじょう}があり、守護の斯波家と守護代家の織田大和守家の居城です。

清州城の北方には織田伊勢守家の居城岩倉城があります。

この三家の外に那古野城^{なごや}（後の名古屋城）には今川家（駿河の太守今川家の親類）は愛知郡の中心部を領域にしています。

斯波家、織田二家と今川家の四家も領域ははっきりしませんが、信秀が引き継いだ時は信秀の織田弾正忠家が一番の勢力だと思われます。

弾正忠家（信秀）の強みはその経済力です。

港町、門前町津島の商業支配からの収入、津島社の拝観料、祈祷料です。

守護斯波家は義統^{よしむね}、織田大和守家は達勝^{みちかつ}、那古野の今川家は氏豊・竹王丸（駿河の太守今川義元の弟で養子）ですが、信秀は四家の中では一番の勇将です。

隣国、美濃国や三河国への対外戦争は尾張国連合軍の大將は信秀です（対外戦争に那古野の今川が参戦したかどうかははっきりしません）。

信秀の弾正忠家の勢力が一番で、国内を統一できる力を持つ最有力者ですが、未だ統一出来ていません（統一は信長）。

その頃東隣の三河国では群雄割拠の時代から松平一族が抜け出し、松平宗家の松平清康が西三河から東三河を制し、居城を岡崎（愛知県岡崎市）にして三河の統一をなしました。1529年（享禄2）頃です。

そして清康は三河平定の余勢をかって尾張東部に侵攻し、守山城（尾張国の東側の春日井郡）を攻めます。

ここで思いもかけず出陣中の清康が家来に殺害されてしまいます。「守山崩れ」と言われています。

後は子の広忠（10歳）が継ぎますが、これで三河での松平勢力は一挙に弱体化します。

東側からは駿河より遠江（静岡県西部）を制していた今川氏に攻められ、西側からは織田信秀（信長の父）の攻撃を受けます。

信秀ですが、清康が横死して松平軍が尾張から兵を引いたこともあって長年友好関係にあった今川家（駿河今川義元弟が城主）城主の那古野城を襲い、攻略して愛知郡を支配します（1538年）。

ここからが信秀の勇躍時代の始まりです。

更に三河に攻め入り、松平の居城の岡崎城の西の安^{あんじょう}祥城を攻略して三河国の西部を支配下に置きます（1540年）。

駿河の今川義元も松平家地盤の三河の東部を攻めます。

松平広忠は松平家の存続のため信秀につくか、今川義元につくかを決めなければなりません。

今川につくことに決め、信秀に対戦するために今川に援軍を求めます。

代償として今川家に子の家康（徳川家康の幼少時代）を人質に出そうとしたところを途中で家康を信秀側にさらわれてしまいます（1547年）。

信秀は西側の美濃も攻めます。

美濃国では守護土岐家と守護代や斎藤道三で権力闘争があり、斎藤道三が土岐家を追放して支配するようになっていました。

信秀はこれにつけ入り美濃の大垣城を攻略していました（1543年）。

しかし道三の反攻があり、美濃で交戦のため出陣しましたが、出陣中に居城古渡城を清須の守護代家の織田^{みちかつ}達勝の家来に襲われます（1548年）。

急ぎ戻り清州衆を追い払い、和議が整いますが、美濃では道三には敗戦です。

その後信秀は今川義元・松平広忠連合軍と三河の小豆坂で戦い、敗戦し更に信秀は占拠していた安祥城も奪回されます。今川・松平連合軍とはいえ、実態は今川軍です。今川義元に負けたのです。

信秀の息子信広（信長の庶兄、安祥城城主）は捕虜になり戦後に、さらっていた広忠の息子の家康とが交換されます。

信秀は三河の地盤を失くしました（1548年3月）。

この後松平広忠は先代と同じく家来に殺されます。この時嫡男の家康は幼く今川義元に駿河で保護されます。

三河国は今川義元の支配となります。

これで信秀は東の三河（安祥城）と西の美濃（大垣城）も拠点も失いました。

信秀が勇躍したのは1538年の那古野城攻略からで1548年までです。

美濃の斎藤道三と和睦します。その証に道三の娘を嫡男の信長の嫁に迎えます（1549年-天文18）。

それではなぜあれほど勇躍していた信秀が急に勢力を減退させたのかです。

一つは、信秀は清州に守護代の織田達勝、守護の義統が一定勢力を持ち、岩倉には織田伊勢守家があります。尾張を統一出来ないまま、三河と美濃へ侵略を試みたことです。

もう一つは1548年頃には信秀は病気にかかっていたのではないかとの説です。

三河の拠点の安祥城を今川軍に攻められた時、自分は出陣せずに城主の若い息子の信広に戦わせ負けました。病気で出陣できなかつたとの説があります。

信秀は1652年末盛城で病没します。病名は疫癘（^{えきれい}伝染病）。

病気から死没まで年数がありますが、死没年が1549年と1651年説があります。

病気が結核だと発病から死没までの療養生活が長くなります。

信秀の死没後の嫡男の信長が後を継ぎます。

信長が後を継いだ状況は、主家の守護代の織田家や守護の斯波家も一定の勢力を持っており、尾張国全体の統一も出来ていないまま、そして三河国からは今川義元が侵攻しつつあり、美濃からは講和の証として道三の娘を嫁にもらっているとは言え油断は出来ません。跡目を狙う弟もいます。

親父はなんでこんな状況で自分に家督を渡すのか。うらみに思ったでしょう。

葬式の席で焼香を位牌に投げつけて帰ってしまったのは信長の気持ちだったのでしょう。

引き継いだ信長の尾張国の統一、天下への勇躍についてはご存じの通りです。駿河・遠江・三河で勇躍する今川義元を後年信長が桶狭間で討つのです。

以上

2026年2月14日

梅 一声

尾張国略図

